

# まちの史跡めぐり……(90)

町文化財専門委員 石瀧 豊美

## 江戸時代へようこそ(3) =石高で成り立つ社会=

江戸時代を特徴づけるのはそれが石高で成り立つ社会だったということです。現在ならば、市町村の規模を図るのに一般的には人口を用います。財政規模や職員数その他の数値を用いることもありえますが、それは行政のプロの場合。

私たちはろうとのレベルでは、やはり人口で比較するのがわかりやすいですね。政令市や市町村の区分は人口規模で行われています。

江戸時代はどのような比較をする時に、石高が用いられました。大名の最低は一万石。四、五万石では小藩の部類です。三〇万石以上だと大藩ということになるでしょう。加賀百万石が大名としては最大で、それ以上は徳川将軍家だけでした。

福岡藩黒田家は五二万石と言われますが、実は四七万石です。五二万石の内には秋月藩黒田家の五万石を含んでいるので、福岡藩だけだと四七万石になるのです。それでも堂々たる大名ということになります。

ではその四七万石にはどんな根拠があるのか。実際に四七万石だったかどうかは別にして、四七万石という数値自体は一枚の田と畑の石高を集計した結果です。石高はすべて、田畑から作り出される米(福岡藩では大豆を含む)の量を意味しているのです。

武士の給料は石高で表現されます。武士は米を給料として支給されたので、現物給付だったのです。米だけでは生活できないので、支給され

た米の一部を自家消費に残り、残りは売り払って換金します。当然ですが、米で着物を買ったりはできません。換金して現金を得なければ、実際の生活はまかなえません。そういう不自由さがありながら、なぜ米で支給されたのか。それは、藩の財政も村から入ってくる年貢に頼っているのです。武士にはその年貢米から給料として支給するしかなかったのです。

農民は田畑を耕作して米やその他の作物を生産します。そして、その一部が年貢として、田の場合は米で、畑の場合は大豆で、藩へ納められます。(実際には大豆は米で代納することが認められていました。)

秋から冬にかけて藩の蔵には年貢として納められた米俵が山積みされていました。その一部が武士に給料として回されていたのです。

この給料としての石高の多い、少ないは、武士の格式を意味していません。二千石程度だと家老の家であり、数百石クラスなら馬廻組に属することになります。これらの武士は年貢としての実収は額面二石について一俵程度だったようです。

仮に二千石だと、その二千石は田畑の生産高を意味します。その全てが武士の収入だと、年貢率100%で、農民の手元には残らないことになってしまいます。農民の取り分や、年貢収納に要する経費などを差し引いて、おおまかに二石一俵が収入の目安になっていたようです。福岡藩の場合、一俵は三斗三升で換算しま

す。途中で俵の目の隙間からこぼれることを恐れて、村では余分に三斗四升を入れています。

問題は年貢収納の基準になる田畑の石高は実際の生産高を意味しないということ。これまで、このことがしばしば忘れられていました。簡単な話です。仮に五石の生産高を持つと評価されている田があるとして、しかし、実際には秋に取り入れてみないとほんとうの生産高はわかりません。夏の間は青々とした稲穂が広がっていても、台風で根こそぎ倒れてしまえば、収穫は激減です。

そうすると、田畑の石高、ひいては村の石高、武士の石高、藩の石高……いずれをとっても、それらは架空の数値でしかありません。あくまでも評価高(見込み)であって、実生産高ではないのです。

私のところに小学校の先生がこういう授業をしたいと言って相談に見えました。

須恵町のある村の石高、仮にそれを三〇〇石とします。年貢率が四公六民だとすると、四〇%。つまり二〇〇石が年貢になります。一石がほぼ三俵なので、三六〇俵を藩の蔵に納めていたわけです。

残り一八〇石が農民の取り分。そこで、一八〇石を村の人口で割り、一人あたりの取り分を出す。それを三六〇日(一年は二ヵ月で約三九〇日、または二ヵ月で約三九〇日)の年もあります)で割り、さらに三で割ると、一日の食あたりの一人分の

米の量が出ることになりました。それをお椀に入れて、これだけしか食べられなかった……と、目に見える形で示したいというのが、授業の趣旨です。

確かにわかりやすい。しかし、ここにはいくつかの考え違いがあります。一日三食かそれとも二食かということとは別として、まず、農民は毎食米を食べたかどうかです。食べたという説もありますが、雑穀を食べ、特別な時だけ米を食べたというのが正解でしょう。

それは米を奪われたから生産者でありながら食べられなかったというのとは違います。米は換金性が高かったため、農民は年貢を納めた残りをまず売って、現金を手に入れることを優先したのです。現金がなければ生活できないのは武士の場合と同じです。

それ以上に大問題なのは、農民の取り分が年貢二〇〇石を除いた二八〇石というところです。年貢は確かに毎年二〇〇石を納めますが、村の生産高は評価高である三〇〇石よりは確実に多かったであろうと見られることです。

評価高三〇〇石の村の実生産高が三五〇石であったとすると、農民の取り分は年貢を除いて二七〇石となります。しかし、残念ながら毎年実際の収穫量はなかなかかわらないので、農民の収入を確実にすることはむずかしいのです。実生産高は評価高の倍はあったのではないかという説もある程です。

久我記念美術館 10月企画展 10月5日(火)~31日(日)  
(月曜休館・祝日の場合は翌日休館・)  
(31日(日)は午前中まで・入場無料)

## 第10回 須恵美術クラブ展



須恵美術クラブ(世話人代表 大場 仁)は、1995年に広く町内外の美術愛好家のつながりを求めて発足し、今年で10年目になります。

現在、会員は37人で、活動は絵画・書・写真・工芸と多岐にわたり、毎年久我記念美術館において作品展を開いております。

第1回目からの通算の来館者は5,000人を超えました。今回、第10回目の作品展をむかえ、過去・現在・未来という時の流れを改めて感じながら会員一同制作に励みました。

みなさま多数のご来場を心よりお待ちしております。

絵画	書	写真	工芸
阿世賀輝雄	案浦博子	井上淳一	稲永育代(染色)
片井光雄	大山静子	大場仁	大石由美子(パッチ)
加藤三絵子	木村夏子	太田直徳	王丸正博(陶芸)
鐘川邦次朗	豊田貢勤	長井昂	木島けい子(パッチ)
合屋佐知子	園田琳子	帆足顕了	木村久典(能面)
合屋光則子	原田格代	細田健一	小蘭國雄(陶芸)
才林美玲子	坂半晴信	吉松寛幸	塚原瑜伽嗣(ステンド)
中野美津子			百田淳子(陶芸)
吉松茂荘			百田公子(織物)
			安松順子(陶芸)

**ギャラリートーク**  
山内 重太郎画伯  
『美術よもやま話 -私が見る久我記念美術館・須恵美術クラブ-』10月17日(日)14:00~

**スタンダードジャズコンサート**  
10月23日(土)18:30~  
airejin(エアジン) 曲目:サマータイム… 他  
アコースティックギターとボーカル

**須恵美術クラブ会員募集**  
●問合せ先 須恵美術クラブ事務局  
(久我記念美術館内) ☎ 932-4987

**9月の企画展**  
9月4日(土)~26日(日)まで山野巖遺作展を開催します。月曜休館、ただし20日は開館します(21日閉館)。